アドホックな関与者による都市農業の維持
――神奈川県川崎市S農園の事例から――

立教大学大学院　水上亮

1　目的

本報告の目的は，近年の都市農業振興を目指す社会的潮流を踏まえ，神奈川県川崎市で農業営むS農園を事例として，都市農業がいかに維持されているのかを明らかにすることである．近年の都市農業は，宅地開発圧力の低下により「不要なもの」から「あるべきもの」として捉え直されている．2015年には都市農業振興基本法が制定され，都市農業の安定的な継続と多面的機能の活用が主張された．それを担う存在として注目されたのが，援農ボランティア，NPO団体，近隣住民などの市民である．例えば，池田（1992）や松宮（2013）は，現代の都市農業が農家と市民の協働により成立していると指摘している．

しかし，事例で取り上げるS農園は，先述した市民に属さない，年齢，居住地，目的などを異にする多様なアクターが関係しながら農業を営んでいる．なぜ，そのようなアクターが存在しているのか．本報告ではこうした問いの検討を通して，都市農業がいかに維持されているのかを明らかにしたい．

2　方法

報告者はこれまで，2018年から神奈川県川崎市のS農園にて，農業に従事しながら調査を行ってきた．S農園は約200年の歴史を持つ，三世代家族（A90代，B70代，C40代が中心）で農業を営む第一種兼業農家である．本報告では，S農園における参与観察で得られたデータを中心的に取り上げ分析を行う．具体的には，S農園の歴史的背景，農園に関わるアクターの関係性を取り上げる．

3　考察・結論

調査の結果，約50名に及ぶアクターがS農園と関わりを持ち，農園の維持や発展に貢献していることが明らかとなった．そうしたアクターは，年齢，性別，職業，居住地，さらには目的意識までもが異なっている．なかには，お互いの名前も知らないような顔見知りの状態で共に農作業を行なうこともある．この意味でS農園に関わるアクターは，援農ボランティアやNPO団体，近隣住民などの枠組みに収斂されない「アドホックな関与者」として位置づけられる．

アドホックな関与者が存在する理由は，都市農業の抑圧に耐えるためにS農園がとった対応から窺うことができる．1970年代の農政運動を経験したS農園の家族は，周囲が農業を断念し，農地を手放す状況をみて「必ずウチの農業を守る」ことを決意する．AとBを中心にS農園の家族は，国内外の農業研修生の住み込みや，生活協同組合を通したホームレスの受け入れをはじめ，家の中に外部者がいる生活を送った．そうした「外部者を受け入れる生活」を幼き頃に経験したCは，就農後もそれを日常として位置付け，あらゆる農作業をアドホックな関与者と共に行ないながら農園を営んでいる．

S農園の事例は，今日の都市農業が既存の枠組みに当てはまらないアドホックな関与者によって担われ，家の中で脈々と継承されてきた「外部者を受けれいる生活」が，現在に至るまで農業を維持させたことを示している．以上のことから，人々のアドホックな関わり方は，高齢化や人手不足に悩む都市農業の存続と発展を手助けする可能性を有しているのではないだろうか．

参考文献

池田寛二，1992,「都市農業の現在と可能性」鈴木広編『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房，224-42.
松宮朝, 2013,「都市部における日農業者主体の「農」の活動の展開――愛知県長久手市、日進市の事例から」『サスティナビリティ研究』3: 85-97.